

勝鬘宝窟の染淨依持説

—浄影寺慧遠『勝鬘義記』と比較しつつ—

鶴 見 良 道

『勝鬘經』の「染淨依持説」は、如来蔵思想の流れにおいて重要な教説である事は、先学の論究せられている如くであり、⁽¹⁾『勝鬘經』において初めて明確なる位置付けを与えられた訳であるが、『經』の説く「染淨依持説」、言い換えれば、

染淨が如来蔵に依持していると言う事、即ち生死流転に誤つて執し苦界にあるとする方向性も、又生死流転を苦であると感じし涅槃を樂求すると言う方向性も、両者共に如来蔵が所依となるとする考え方を、中国諸註釈書は、どのように理解しているのであろうか。その点を中国諸註釈書中「摺_ニ拾古今_ニ搜_ニ檢_ニ經_ニ論_ニ撰_ニ其_ニ文_ニ玄_ニ」と自負する吉蔵の『勝鬘宝窟』の解釈を中心として考察したい。

『勝鬘經』に説かれる限りにおいては、染淨依持と言う表現は見られず、唯「是故如来蔵是依是持是建立」とか、又「断脱異外有為法依持建立者是如来蔵」として依持の語が見られるのみである。『勝鬘經』では、如来の法身が煩惱を離

れていない事を「如来蔵」と定義し、煩惱蔵を離れた法身と煩惱に覆われた衆生との関係を明らかにする為に、現実の衆生の在り方即ち生死と如来蔵との関係を

世尊。生死者依如来蔵。以如来蔵故説本際不可知。世尊。有如来蔵故説生死。是名善説。世尊。生死。生死者諸受根没。次第不受根起。是名生死。世尊。死者此二法是如来蔵。世間言説故有死有生。死者謂根壞。生者新諸根起。非如来蔵有生有死。如来蔵者離有為相。如来蔵常住不變。是故如来蔵是依是持是建立。世尊。不離不断不脱不異不思議佛法。世尊。断脱異外有為法依持建立者是如来蔵。(大正蔵十二卷、二二二頁中段)

と説いている。吉蔵の『勝鬘宝窟』によると『經』のこのところは、「顛倒真実章」として解釈を加えるのであるが、すでに「一依章」において無作の四聖諦中、滅諦こそ有為の相を離れ、一切のよりどころであるから出世間上上第一義依として「一依」を説きながら、又この章即ち「顛倒真実章」において、どうして「生死者依如来蔵」として「依」を改めて

説くのかを自問自答して

問。此與^一上一依^二何異。答。上是境為^三智依。今明^四染淨依。又前亦得^五是顯為^六顯依。今亦得^七是隱為^八顯依。境為^九智依。一実諦境能生^{一〇}一実智。上明^{一一}二乘四依智乃至二乘果智依^{一二}有量滅諦。境既非^{一三}究竟^{一四}故智亦非^{一五}究竟。為^{一六}對^{一七}彼故明^{一八}無作滅諦是究竟。能生^{一九}究竟智^{二〇}故。故境為^{二一}智依。又前明^{二二}顯法為^{二三}依者。滅諦顯現為^{二四}如来所証。故前云一切智境界及如来法身。又前是能生依。以^{二五}境能生^{二六}智故。後明^{二七}依持名^{二八}依。非^{二九}仏性能生^{三〇}生死。就^{三一}前積^{三二}依以^{三三}依憑^{三四}為^{三五}依。就^{三六}後積^{三七}依以^{三八}依持^{三九}為^{四〇}依。後以^{四一}隱法^{四二}為^{四三}顯依^{四四}者。如来藏即是隱能為^{四五}生死顯法^{四六}作^{四七}依。(大正藏三七卷・八一頁中段下段)

と説き、一依章の「依」を「境と智」との関係で、「依如来藏」の「依」を「隠と顯」との関係によって説明するのである。「境と智」との関係、言い換えれば、どうして無量なる滅諦が眞実智のよりどころとなるのかと言う点に関して、二乗の智慧は究竟ならざる境、つまり有量の四諦即ち分段生死の世界において説かれた法を所依としているから、その智は究竟ではなく、眞実智は無量なる四諦即ち變易生死の世界において説かれた法を所依としているから、究竟智であると説くのである。又顯法を頼りにすることは、一滅諦が顯現して、然も無量滅諦を如来藏空智が明確に認識し、あらわになると言う意味で顯法による、つまり「依憑」と言われるのである。そして無量滅諦こそよく究竟の如来智を生ずるとして、その点から無量滅諦に依るを「一依」と説明するのである。しかし

今問題の「染淨依持」の立場は、「隠と顯⁽²⁾」との関係で論じられ、隠とは、衆生が迷って顛倒しているが故に如来性を覆ってしまっている事を言い、顛倒を断除して如来藏の理を知ると言う事が顯であり、その顯が、法身と名づけられると吉蔵は説明するのである。そして如来藏が顛倒迷なる状態即ち隱であるが、よく染淨の顯法の所依となるとして、先の「依憑」の義つまり「境と智」との関係に対して、如来藏と染淨即ち「隠と顯」との関係を「依持」とし、「依」を解釈して「依憑」と「依持」との二義の區別を立てている。吉蔵の「一依」と「依持」との區別は、以上の如くであるが、今その吉蔵の解釋の特色を見るに、吉蔵が『勝鬘宝窟』の中で一番多く引用批判する慧遠の『勝鬘義記』⁽³⁾の依持解釋と対比させて考えると、慧遠が染淨依持を解釋するに「依義」「持義」「縁起建立義」と區別を立てているのに対して、吉蔵は、「隠と顯」とで染淨依持に解釋を加える点であろう。

さて染淨依持、特に染依については、『經』に「生死者依如来藏」と説かれる如くであり、生死とは、前の諸受根が滅し、新しく不受根が生起すると言う事であり、それが流転であつて『經』においては、顛倒の衆生に付随して説かれ、顛倒は三種に分けられ墮身見の衆生、顛倒の衆生、空乱意の衆生であり、不顛倒なる衆生は、仏語を信じ如来の法身こそ常楽我淨の四波羅蜜多であると正しく認識している者と説くのか

である。こうして生死流轉の在り方を如実に見ない事から三種の顛倒が起るのであり、その顛倒を離れる様な人には、生死流轉の在り方が如実に見えていと言ふ事であるが、『経』は特に生死流轉の見方について「如来蔵を所依とする」と説くのである。

それなれば、如来蔵が生死流轉に対して、どのように所依となつているのであるか。

『勝鬘経』は、

世尊。若無如来蔵者。不_レ得_レ厭_レ苦樂_二求涅槃。何以故。於_二此六識及心法智_一此七法利那不_レ住。不_レ種_二衆苦_一。不_レ得_レ厭_レ苦樂_二求涅槃。世尊。如来蔵者。無_レ前際_二不起不滅法_一。種_二諸苦_一得_レ厭_レ苦樂_二求涅槃。〔大正蔵一二卷・二二三頁中段〕

と説き、六識及心法智は利那滅なるものであり、従つて苦を感受し、苦を厭い涅槃を願ひ求める主体には、成りえないとするのである。だから六識及心法智以外に苦を感受し、涅槃を願ひ求める主体が考えられなければならず、それが如来蔵に他ならないと『経』は説くのである。『勝鬘宝窟』によれば、『経』の六識及心法智の解釈に八識説を導入して解釈をする考え方と、心王心所法で解釈する考え方の二種類がある事が知られる。吉蔵は、八識説を導入して六識及心法智に解釈を加える慧遠の『勝鬘義記』を引用して

慧遠『勝鬘義記』

吉蔵『勝鬘宝窟』

妄心自能與_レ染造_レ淨。何須_レ依_レ蔵。下対_レ積_レ之於_レ中。初先明_二妄_一。能起。妄謂七識。真謂蔵識。此猶經中所説八識。八識之義広如_二別章_一。此応具論。前明_レ妄中。於此六識及心法智。挙_二其妄心_一。六是事識。及心法智是第七識。迷時名_レ心。解_レ名_二法智_一。此七不住。明_二其離_レ真妄_一。事六妄一合為_二七法_一。無_レ真此七一念不立。名_二利那不住_一。〔ペリオ、二〇九頁〕

と述べ、吉蔵は八識説を導入して六識及心法智を解釈する慧遠の説を『攝大乘論』では、第七識が法智の名をもって称せられた事がない即ち『攝大乘論』では阿陀那と言ひ、又慧遠自身も『大乘義章』⁽⁴⁾八識義の中で第七識を無解識と言つていゝる事から、どうして法智と称するのかとして慧遠の説を否定するのである。そして吉蔵は、六識は心王であり、心法智は六識の働きとしての心所と解釈し、そのいずれの法も苦を厭い涅槃を染求するものでない事を

所_二以_レ挙_二此七法_一者。挙_二六識_一明_レ不_レ能_レ起_二染淨_一及_二以_レ種_二苦_一。挙_二心法智_一明_レ不_レ能_レ厭_レ苦樂_二涅槃_一。〔大正蔵三七卷・八三頁下段〕

と『勝鬘宝窟』は説き、六識は染法や浄法を起したり、苦を感受したりする事はなく、六根によって六境を知るのみであり、心法智は心所であり、六根を通じて心王に外境が知らされると同時に認識分別作用を起すのみであり、心王心所には、苦を感受し涅槃を楽求すると言う働きはないと解釈し、吉蔵は如来蔵仏生をもって染法浄法の依持とするのである。従って吉蔵は、『経』に忠実な解釈を施していると考えられるが、慧遠は、前述の様に八識説を導入して独特の解釈をしているし、敦煌出土の諸註釈⁽⁵⁾を見ても、その解釈は種々でこの「六識及心法智」については、吉蔵の解釈が絶対とは言えないであろう。

慧遠の説を引用批判した結果と思われるが、吉蔵は、染浄縁起として染浄依持解釈の立場を四種にまとめている⁽⁶⁾。一は「約縁不約仏性」の立場、二は「約仏性不約縁」の立場、三は「亦約縁亦約仏性」の立場、四は「不約縁不約仏性」の立場である。ここで「仏性」の立場に立って、生死や涅槃を考えると云う事は、ここ迄の考察で理解される所であるが、「縁」の立場とは、何を意味するのであろうか。ここでは「六七妄縁」とある事から、一種に心心所及び後の法相唯識で説く様な第七識の内容を示すと考えられるが、他に「縁」の用法の一部として『勝鬘宝窟』には、「於理未始二。六道常法身。於縁未始一。法身常六道」とか「依者自性住仏性。

不從縁有」とか「蔵体無垢名自性清淨。隨縁相染」の様に「縁」の用法もあり、吉蔵が「縁」と表現する時は、煩惱性を言う事は間違いなく、広い意味で「衆生」そのものを「縁」と表現する場合もあるのではないかと考えられる。染浄縁起四句分別の第一は、二乗及び大乘の種類の立場即ち仏性を立てず心心所、又は第八識によって生死涅槃を説く立場、第二は、単に仏性だけを立て衆生心の立場に立たず、仏性によって生死涅槃を説き、煩惱は客塵として妄縁で、心に相應なるものであるから刹那滅であると説く『勝鬘経』の立場であろう。第三は、たぶん慧遠の説く染浄依持説を指すものと考えられる。それは『勝鬘義記』の内容を考慮するに八識説を導入した考え方で、阿梨耶識は真妄和合識であるとし、仏性如来蔵の立場と六七心の立場が共に因縁となつて生死涅槃を成り立たしめていると云う立場であろう。第四は、「実相之外無縁故無染浄法可起」と説いている事からたぶん「諸法実相」を主張する吉蔵自身の立場であろう。

以上の様に吉蔵は、染浄依持解釈を四種に分類するのであるが、『勝鬘経』自体は、吉蔵の四句分別から考えるに、如来蔵仏性のみによって依持を説く第二の立場と考えられる。しかし、吉蔵の様に「不約縁不約仏性」とする立場にあっては、吉蔵自身六七妄縁の事実と仏性との関係を、どのように考えているのかと云う事を改めて問う必要があると思われる。

『勝鬘經』では

此自性清淨如来蔵而客塵煩惱上煩惱所染不思議如来境界。何以故。利那善心非煩惱所染。利那不善心亦非煩惱所染。煩惱不触心。心不触煩惱。云何不触法而能得染心。（大正蔵十二卷・二二二頁中段）

と自性清淨心と心心所との關係を説くのである。この一文を解釈して『勝鬘宝窟』は、まず慧遠の『勝鬘義記』の説を引用して、

有人言。利那善心不善心不為煩惱所染者。正解淨義。利那是念。念善心体念惡心体。煩惱俱不能染。不能染故淨。煩惱不触心心不触煩惱者。积前不染。煩惱出自妄情不及真識。故不触心。抛真無妄故不触煩惱。其猶世人見繩為蛇。蛇出妄情故不触繩。繩体常淨。亦不触蛇。云何不触法而能得染心者。責遣染過。（大正三七卷・八五頁下段、八六頁上段）

と説く解釈をあげるのである。ここで慧遠の解釈について一言すると、「利那の善心不善心は煩惱の所染に非ず」と説くのは、自性清淨の義を解釈するのであるとし、利那なる心意識を念と把握し、善及び惡を一利那に念ずる心の体そのものは、煩惱に染せられるものではなく、客塵によって善心不善心となるに過ぎず、心の本質は、自性清淨心であるとするのである。その結果客塵煩惱は、自性清淨心に触れないのであり、「煩惱は心に触れず心は煩惱に触れず」を説明して、煩惱は、妄情即ち最根源的には業を因とし無始無明住地を縁とする四

住地によって妄分別なる執着が起るのであって、煩惱は真識即ち自性清淨心に触れるものではなく、又自性清淨心より起るものでもないと言く。故に煩惱は、心即ち自性清淨心に触れるものではないと同時に、真即ち自性清淨心には、本来妄性がないから煩惱に触れないと説くのである。それは丁度世間の人が、繩を見て蛇と思ひ込む様で、繩を蛇と思うのは誤った考え方より出てくるのであり、蛇即ち妄執と繩即ち自性清淨心とは、なんら關係はなく、蛇は煩惱より起り繩それ自体に触れているのではなく、妄情によって繩を蛇と見誤っているにすぎないと説いている。それでは、この慧遠の説を引用する吉蔵の解釈は、どうであろうか。吉蔵は、

利那善心非煩惱所染者。此借龜頭細也。善心是淨。不善心是垢。善心之中無有貪瞋癡。是為淨中無有垢無有染義也。利那不善心亦非煩惱所染者。不善心者即是貪瞋癡心也。当起貪瞋癡時。善心已謝。不善心既即是煩惱。是則唯垢無淨。唯能染無所染。亦無染義。前句有淨無垢。有所染無能染。不成就染義。後句有垢無淨。有能染無所染。亦不成就染義。（大正蔵三七卷・八六頁上段）

と解釈し、吉蔵は利那善心を淨とし、利那不善心を垢即ち貪瞋癡心であると解釈している。利那に淨心が起る時は、自性清淨心が「頭」と成っているのであって心全体が淨であると、利那に不善心が起る時は、自性清淨心は六七妄心によつ

て「隠」となり、心全体が貪瞋癡の心となって両心が俱に存すると言う事はないと説くのである。善心の時は心全体が浄と成るのであり、そこには所染即ち染せられる浄心はあるが、心全体が善心となつてゐるから能染即ち染する煩惱は立たなくなり、故に染すると言う義が成り立たないと説き、又不善心の時においても、心全体が貪瞋癡心であり、その時には能染即ち染する煩惱性はあるが、所染即ち染せられる浄心はなく、故に善心不善心は、煩惱の所染ではないと解釈している。ただ興味ある両者の解釈の違いは、「六識及心法智」の解釈の異りと同様、「善心不善心」における両者の解釈の異りである。慧遠は、自性清浄心を根底として、現実的な心の動きとして善心と不善心とを平等の立場より見、善を念ずるも悪を念ずるも、その心の体そのものは、自性清浄であり何ら煩惱に染せられているものではないと解釈するに對して、吉蔵は、善心を浄とし不善心を貪瞋癡心として解釈を加え、善心の時は全てが浄心で、その時は不善心はなく、不善心の時は全て煩惱心であり、その時は浄心は起らないと説明し、善心を自性清浄心、不善心を煩惱心として所染能染の関係より解釈し、その根底としての自性清浄心を問題にするよりも、善心不善心の実相そのものを問題にしている点との異りである。

以上、吉蔵による「染浄縁起四句分別」を手がかりにして『経』自体の染浄依持説の把握をしつつ、吉蔵の解釈を考察

したのであるが、真妄論を導入する慧遠の『勝鬘義記』の解釈に比較すると、吉蔵の解釈に実相論とも言える独特の面がうかがわれ、「善心不善心」の解釈も一例と思われるが、その特異性は、むしろ吉蔵の教学全体から考へるべき事は当然である。従つてこの小論では、慧遠の解釈との比較に止め、吉蔵の仏性如来蔵の全体的考察は、他日を期して進めたい。

1、高崎直道『如来蔵思想の形成』九七～一二六頁・三五〇～三六六頁参照。

2、『涅槃經遊意』（大正蔵三八卷・二三二頁下段）

只迷故名隠名蔵。豈尚別有_二此体可_レ隠。只悟故名_レ顯。名_二法身。無_二体可_レ顯。迷故名_レ隠。隠無_二所隠。悟故名_レ顯。顯無_二所顯。

平井俊榮「吉蔵撰『涅槃經遊意』国訳」（駒沢大学仏教学部論集第三号）参照。

3、『勝鬘義記』卷下（ペリオ・二〇九一）

世尊。生死依如来蔵。是依義也。生死依_レ真。如_二波依_レ水。亦如_二夜闇見_レ繩為_レ蛇。蛇必依_レ繩。以蔵説本不可知者。是持義也。由_レ蔵持故久続。不断故説_二本際不可知_レ也。有蔵説死名善者。是其縁起建立義也。由_レ蔵起_レ染故得_レ就_レ之説為_二生死。

慧遠の依持・縁起の考察は、吉津宜英「浄影寺慧遠の縁起説について」（曹洞宗研究員研究紀要第六号）「慧遠の仏性縁起説」（駒沢大学仏教学部研究紀要第三十二号）参照。

4、『大乘義章』八識義（大正蔵四四卷・五二四頁下段）

阿陀那者。此方正翻。名為_二無解。体是無明癡闇心故。

5、『勝鬘義記』（大正藏八五卷・二六〇頁下段）

於此六識及心法智者。積有_レ多苦。心是主故名爲_レ法智也。

『勝鬘經疏』（大正藏八五卷・二七七頁上段）

六識者依_レ六根_レ生_レ心。及心者意根也。法智者意根中空解也。

『勝鬘義疏本義』（岩波『聖德太子集』四五六頁下段）

及心法智。意根能_レ解_レ識。故稱爲_レ知也。

高崎直道『如来藏思想の形成』三五三〜三五六頁「心法智」參照。

6、『勝鬘宝窟』（大正藏三七卷・八三頁下段〜八四頁上段）

然經論中。積染淨緣起_レ要有_レ四句。一約緣不_レ約_レ仏性。二約_レ仏性_レ不_レ約_レ緣。三亦約緣亦約_レ仏性。四不_レ約緣不約_レ仏性。一約緣不_レ約_レ仏性者。只由_レ六七妄緣_レ不_レ由_レ如来藏。此小乘教及大乘教相中。彰染淨緣中因果自招感故有_レ。都不_レ言_レ由_レ藏_レ実_レ而有_レ。如_レ是一切。二明_レ約_レ仏性_レ不_レ約_レ緣。染淨之興只由_レ藏_レ実_レ。不_レ言_レ從_レ緣而有_レ。此如_レ楞伽説。六七非_レ受_レ苦樂。非_レ涅槃因。藏識受_レ苦樂。是涅槃因。如_レ是一切。今此説亦同_レ彼也。三明_レ亦約_レ緣亦約_レ仏性_レ者。此亦如_レ楞伽説。藏識海常住。境界風所_レ轉。種種諸識浪。騰躍而_レ轉生。如下海水起_レ波浪_レ非_レ異_レ非_レ不_レ異_レ。仏性亦爾。心俱和合生。亦非_レ異_レ非_レ不_レ異_レ。如_レ是一切。故知。真妄和合方起_レ染淨_レ。海水起_レ波淨_レ非_レ異_レ非_レ不_レ異_レ者。彰不_レ可_レ水外求_レ波。波外永_レ水。故言_レ不_レ異_レ。而波息水靜。故言_レ非_レ不_レ異_レ也。仏性亦爾。心俱和合生非_レ異_レ非_レ不_レ異_レ者。彰仏性與六七妄心和合生時。不_レ可_レ真外求_レ妄。妄外求_レ真。故言_レ不_レ異_レ。而妄_レ真_レ顯。故言_レ非_レ不_レ異_レ。亦可_レ在_レ緣常靜。故言_レ非_レ不_レ異_レ。法華論云。不_レ即_レ衆生界。不_レ離_レ衆生

界。有_レ如来藏性。故經言。仏性雖_レ在_レ陰界入中_レ而不_レ同_レ陰界入_レ也。四不_レ約緣不_レ約_レ仏性_レ者。実相之外無_レ緣故無_レ染淨法可_レ起。此如_レ金剛波若論説。平等真法界。仏不_レ度_レ衆生。以_レ無_レ仏爲_レ能度。無_レ衆生爲_レ所度_レ。又如_レ十地論説。煩惱妄想中無_レ法可_レ滅。清淨法中無_レ法可_レ增。泯_レ上三門_レ歸_レ乎一絶_レ。

7、この「有人言」で引用せられる箇所は、ペリオ・二〇九一

『勝鬘義記』の本文と同一なるものである。参考として、その「ペリオ・二〇九一」の本文を上げる。

刹那善心非煩惱染。刹那不善亦非染者。正解_レ淨義。刹那是念。念_レ善心_レ非煩惱不_レ染。念_レ惡心_レ非煩惱亦不_レ染。不染故淨。惱不_レ觸心。心不_レ觸惱。積_レ前不染。惱出_レ妄情_レ不_レ及_レ真識。故不_レ觸心。拋_レ真無_レ妄故不_レ觸_レ惱。其猶_レ世人見_レ繩爲_レ蛇。蛇出_レ妄情_レ故不_レ觸_レ繩。繩_レ常淨。亦不_レ觸_レ蛇。云何不_レ觸_レ而能染者。責_レ遣_レ染過_レ。